



Title	含翠堂文庫本鷺流狂言『八句連歌』（解説・翻刻）
Author(s)	島津, 忠夫; 川崎, 剛志
Citation	語文. 1988, 51, p. 52-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68787
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

含翠堂文庫本鷺流狂言　『八句連歌』

解説

島津忠夫

翻刻川崎剛志

摂津国平野郷の七名家の一、土橋家旧蔵書が大阪大学に入ったのは、昭和二十年代のことと、二十九年より本誌十二、十三、十五号に連歌関係の資料などが紹介され、早くから注目されて来た。現在、系図・旧記・資料の類が文学部国史研究室に、文芸関係は国文研究室にと分れて保管されており、それぞれ『含翠堂（土橋）文庫目録』（昭和四六年刊、国史研究室編）『含翠堂（土橋）文庫目録一続』（昭和五十九年刊、国文研究室編）が公刊されている。私は後者の目録作成に関与した際、鷺流の狂言本が数冊あることを知った。

いずれも宝暦九年の書写本であり、鷺流であることからも検討の必要性を痛感したので、昭和六十年度の国文学演習に取り上げ、受講の学部・大学院の学生たちとともに、そのうちの数曲を細かく読みたことがある。

ここには、その概要を紹介し、「八句連歌」の一曲を翻刻することとする。

所収の狂言本の書誌をはじめに記しておく。

一、末広・梶山伏
半紙本、合一冊。共表紙中央に「〈三人〉末広〈主〉」「〈三人〉

函架番号「土橋0-1」

半紙本、合一冊。共表紙中央に「〈二人〉二九十八〈半〉」「〈二人〉地藏舞〈坊〉」、下に「鷺流狂言」、左下に「益利写之」。裏表紙の表に「宝暦九己卯年三月吉日 写之」、裏表紙の裏に「宝暦九己卯年三月吉日 写之」の奥書。墨付五丁。

三、祐せん・節ぶん・法師母・八句連歌・三人支離（かたわ）・朝日奈・瓜盗人・佐渡狐・鷠狸・井井
函架番号「土橋0-3」
半紙本、合一冊。共表紙上部に、「〈三人〉祐せん〈舞〉」「〈二人〉節ぶん〈鬼〉」「〈二人〉法師母〈狂〉」「〈一人〉八句連歌
半」「〈四人〉三人支離〈半〉」「〈一人〉朝日奈〈責〉」「〈二人〉瓜盗人〈盜〉」「〈三人〉佐渡狐〈脇〉」「〈一人〉鷠狸〈太〉」「〈三
人〉井井〈座〉」と横に並べ、中央下に「鷺流狂言」、左下に「三
吉日 写之」の奥書。墨付二十二丁。

四、空腕・膏薬練

半紙本、合一冊。共表紙中央に「(二人) 空腕(太)」「(二人) 膏薬練(半)」、下に「驚流狂言」、左下に「土橋八治郎」とある。裏表紙の表に「宝曆九己卯」とし／四月上旬写之の奥書。墨付十六丁。

五、魚説法

半紙本、一冊。共表紙中央に「魚説法」、左下に「末吉四良三郎／(花押)」、卷末六丁表に「宝曆九己卯正月吉日／末吉四良三郎宗（花押）」の奥書。その裏に落書がある。裏表紙に「驚流」と墨書。墨付六丁。

六、魚説法

函架番号「土橋〇5」
半紙本、一冊。共表紙に「(二人) 魚説法(坊)」、下に「驚流狂言」、左下に「(三上直二郎)／益利書之」、裏表紙の表に「宝曆九己卯年三月吉日写之」の奥書。墨付五丁。

所写者の三上・土橋・末吉はそれぞれ平野郷七名家に属し、三上直治郎・益利・土橋八治郎・末吉四郎三郎は、その当時の若旦那衆であつて、その稽古の為の本であるといえよう。平野の郷土史家村田隆志氏の御教示を得たところを記すと、その三上直治郎・益利は、『享和二年改土橋氏・三上氏・三宅氏過去帳（含翠堂文庫蔵）より、三上好直の次男で、名を益利、法名を如圭といい、寛保三年（一七七五）の生まれで、安永四年（一七七五）三月七日に三十三歳で没していることが知られる。従つて、宝曆九年（一七五九）当時は十七歳の若さであった。土橋八治郎ははつきりしないが、年代から見るところ、土橋重栄が相当する。名を虎千代、後に虎治郎七郎兵衛といい、八治郎といったことは明らかではない。ただし、元文四年（一七三

九）に土橋家を相続し、寛政二年（一七九〇）三月七日に五十七歳で没しているので、もしこの人とすれば、宝曆九年は二十六歳ということになる。末吉四郎三郎については、『平野末吉五家系譜』（『船場紀要』第一号所収）より、四郎三郎を名乗るのは東末吉家で、末吉宗久の子の宗勝、その子の宗政、さらにその子の宗城がそれぞれ四郎三郎を名乗つており、宗勝は享保十九年（一七三四）に没しているので、宗政が宗城ということになる。さらに、大坪利絹氏の御教示によれば、『坂上姓末吉系図』には、四郎三郎を名乗るのは、宗勝と宗政で、宗政は天明元年（一七八一）に七十三歳で没しているので、宝曆九年は五十一歳ということになる。これでは、ほかの二人と少し年が違ひ過ぎるようと思われる。ところで、宗城は、この系図に詳記がないのではつきりしないが、四郎三郎を名乗つていたとして、かりに宗政二十五、六歳の頃に出生したとして、宝曆九年には二十七、八ということになり、ほかの二人の年齢に近くなり、四郎三郎を名乗つていた確証には欠けるが、其の可能性は十分あると考えられるので、この宗城がふさわしいと思われる。

また、各曲の上に登場の人数を、下に分類の略号を記している。その分類は、伝右衛門系の保教本とも異なつてゐる。この分類の略号については、田口和夫氏の御教示を得て、一応左のように解くことができた。

- 一、 脇〔脇狂言〕 佐渡狐（脇狂言）〈忽〉〈享〉
- 二、 主〔主事か〕 末広（脇狂言）〈忽〉〈享〉
- 三、 坊〔坊主事〕 地藏舞（出家事）〈忽〉〈享〉
- 魚説法（雜）〈忽〉

ふつうは出家事。

四、狂〔狂女事か〕法師母〔女事〕〈惣〉〈享〉

鬼〔鬼事〕

節分〔鬼事〕

〈惣〉〈享〉

責〔責狂言〕

朝日奈〔鬼事〕

〈惣〉〈享〉

山〔山伏事〕

梶山伏〔山伏事〕

〈惣〉〈享〉

山座〔座頭事〕

井井〔座頭事〕

〈惣〉〈享〉

盜〔盜人事〕

瓜盜人〔盜人事〕

〈惣〉〈末〉

〈享〉

太〔太郎冠者事〕

隱狸〔盜人事〕

〈惣〉〈末〉

〈享〉

十、九、太〔太郎冠者事〕隱狸〔盜人事〕〈惣〉〈末〉〈享〉
十一、狂〔狂女事か〕法師母〔女事〕〈惣〉〈享〉
十二、祐善〔雜〕〈惣〉〈未〉〈享〉
十三、祐善は能がかりの舞狂言。

十四、半〔半袴事か〕二九十八〔雜〕〈惣〉

十五、八句連歌〔盜人事〕〈惣〉〈未〉〈享〉
十六、三人支離〔座頭事〕〈惣〉〈未〉〈享〉
十七、育葉練〔雜〕〈惣〉〈未〉〈享〉

長袴物に対するの称か。シテはいすれも狂言袴又は
狂言上下下。

（惣）は『驚流狂言伝書』（享保九年元年）の「狂言目録」

（享）は同じく『享保九年驚流狂言』の略。

驚流の狂言本として、本文が紹介されているものとしては、

忠政本 延宝六年忠政写。仁右衛門系。田口和夫氏藏。『静岡

英和女学院短大紀要』11（昭和五十四年四月）。

宗教本 享保六年～九年ころ。驚流狂言宗教写。天理図書館蔵

『驚流狂言伝書』（天理図書館蔵）所收。

賢通本 安政二年賢通写。仁右衛門系。『狂言集 下』（朝日古

典全書）所收。

があるに過ぎない。驚流の成立・伝右衛門系については、『驚流狂

言伝書』（天理図書館蔵）の宗教本に付せられた田口和夫氏の解説に詳しい。宗教本が玄人の本として、演出の注記などが詳しいのに対し、含翠堂文庫本は、まったくの素人の旦那衆の稽古本で、恐らくは師匠の本を借りて、必要な本文を書きしたものであるが、それにしても、その本文が宗教本と大きく異なるのは、仁右衛門系に属するものかと思われる。その性格については、伝右衛門系の宗教本と異なり、かえって大蔵流の虎明本などに近いものもあり、「一曲一曲を分析する必要があるが、ここには「八句連歌」を翻刻するに当たり、「八句連歌」についてのみ、主要な問題点を書き記しておく。」

この曲は、「天正狂言本」には見えないで、その成立についてははつきりしないが、大蔵流の虎明本、和泉流の天理本にもあり、そのころには、一応の固定した形態をもつていたと考えられる。その便概は、『日本古典文学大辞典』の説明（小林賛氏執筆）を借りれば、

借金のある何某（シテ）が貸し手である亭主の家で床や懐紙をほめているうちに、二人で連歌の表八句を詠むことになる。そして、

何某 花盛り御免あれかし松の風

亭主 桜になせや雨の浮き雲

何某 幾度も霞にわびん月の暮

亭主 恋せめかくる入相の鐘

何某 鶏もせめて別れはのべて鳴け

亭主 人目もらすな恋の閑守

何某 名の立つに使ひな告げそ忍び妻
と付け合つた末に、亭主は八句目に、
あまり慕へば文をこそやれ
と借金証文を引き裂いて留める。

となる。その発句と脇句が、明応八年序の『竹馬狂吟集』に見え、『竹馬狂吟集・大筑波集』(新翻日本古典集成)の頭注では、「『大筑波集』一本には「畠字連歌発句」と詞書して前句のみが出ている」と指摘されている。発句が畠字連歌であったとすれば、「御免」という語を読み込んでいるわけであって、この句は「頭注に示されているように、「御めんあれかし」という会話調に、「なせや」と同じく会話調で応じたところにおもしろみがあるのであって、「なせや」も、もとは「為せや」で、「同じことならむしる空の浮雲をも桜に変えてほしいものよ」と訳されているごとき意であつたものと思われる。その「なせや」を「濟せや」と取つて、発句と応じて、借金の返す、返さぬの応答としたところに狂言の素材としてはたらきがあり、さらに表八句まで、その応酬で緊迫した場面を盛りあげてゆくところに、この狂言の中心がある。

私はかつて『連歌史の研究』の「俳諧連歌の発生」の章で、

「八句連歌」の場合、「竹馬狂吟集」が狂言の句を探録したものか、あるいは先にかういった俳諧があつて、それをもとに狂言に脚色したものか、にはかに決定することは困難であるが、この句が「鷹司本俳諧連歌」を除いて、後の『大筑波集』に見えないからといって、そんなに新しいものではないといへさうである。と述べているが、どちらかと言えば、「竹馬狂吟集」の「春部」に収められていることや、発句が畠字連歌であったとすれば「竹馬狂

吟集」が狂言の句を探録したものではなく、こうした著名な俳諧があつて、それをもとに狂言を作つたと考えるべきであろう。そうして、その原型は、この俳諧がよく知られていたころにさかのぼらせ、その成立を考えるべきであろう。従つて、室町末期には、この狂言の骨格だけはほぼ出来ていたであろうと思う。この八句の連歌が、各流の諸本で多少の異動はあるもののほとんど同じであり、七句目の「使ひなつけそ」を「付けそ」と取つて、亭主が怒ったのを、「告げそ」と何某が言い分けをし、亭主(貸手)が八句目を付けて、証文を返してやるという展開や、そのあとの何某(借手)の喜びの小歌でめでたく終る筋、その小歌の歌詞がまた各流でほとんど異動のないことからもそのことは言えそうである。

各流の異動は、その連歌に持ち込まれる前半の脚色にある。この曲は、今翠堂文庫本も、保教本とその展開は同じで、大蔵・鷺・和泉の三流三様の相違がはつきり見られる。

大蔵流は、亭主の方が取り立てに何某のもとに出かける。何某は居留守を使うが、裏口から抜け出るところを見付けられ、亭主の家に同道され、返済を迫られ、懐紙に目を留めて連歌になる。それに対しても、鷺流では、何某が延引の挨拶に亭主の家に出向き、懐紙に目を留めて連歌になる。また、和泉流も、鷺流と同じく何某が亭主の家に出向くのであるが、亭主の方は、また借金を借りに来たのかと居留守を使う。何某は仕方なく発句をよんで留守居のものにことづけて帰ると、亭主が呼び戻して連歌になるという点が異なつている。この三様の違いによって、何某の性格、何某と亭主との関係に違いがあり、大蔵流では、同道して来て何某を家に入れる、と「やい／＼そんじやうそれがわせた。かどへもうらへもだすな」「是

はめいわくで御ざる。是へまいるからは、いつかたへ參うぞ。なさけなひ事を仰らるる」（虎明本）といったやりとりも見られるのである。大藏流は、虎明本・虎寛本・山本東本、和泉流は、天理本、和泉流古本・小早川本、鷺流は保教本・含翠堂文庫本、賢通本を比較してみたが、以上の大筋においては共通している。このことは、この三流の特色が江戸初期において固定していたことを示している。

田口和夫氏の御教示によれば、「八句連歌」の諸本は、大藏流・和泉流は各時代の台本があるので対して鷺流は極めて少ないようである。寛政有江本（現藏鶴世宗家、米沢藩芸者組有江家の台本・天明八（一七八八）～寛政二（一七九一）書写、有江九十九郎正乗奥書、仁右衛門系、文化小杉本（中村保雄氏現蔵、佐渡の狂言師小杉氏所持本、文化元（一八〇四）の年紀のある一書あり、賢通本と兄弟本と見え、ほとんど同文）のみで、そのコピーを送つてもらつたが、いずれももとより上記の点に関しては鷺流の型である。田口氏は、保教本における演出のゆれ具合から見ると、鷺流ではあまり上演されなかつた曲かとも言われるが、鷺流の型が三流のうちで、もっとも素朴であることからは、案外に古い型を留めていると見てよいのではないかと思う。

翻刻

(凡例)

翻刻に当つては、できるかぎり底本に忠実にと心掛け、以下の各項のような方針に従つた。

一、漢字仮名の別、仮名づかい、送りがな、正濁は底本のままとしが、異体字は、漢字、仮名ともに通行のそれに改めた。

二、底本の朱書きは「へ」で囲んで区別した。ただし、詞章の出だしの「へ」はすべて朱書きなので、「へ」で囲むことを省略した。底本に「へ」が落ちているところは「〔へ〕」として示した。

三、読みやすくするために、読点を付し、詞章の話し手を「何某」「亭主」として示した。底本にある濁点・句点は朱墨の区別はしなかった。

四、謡の部分に、朱でゴマ点で付されているが、印刷の都合上、省略した。

五、底本の誤と思われるところには、右に(マム)と記した。濁音で読むところに、濁点のないところは、そのままとした。

六、丁移りには」で示した。

八句連歌
〔アシテ
長上狂言集
儀状有〕

「何某」「へ」是は此当りの者でござる、爰にたれ殿と申て大有德人が御座る、某内証不手廻り時分、金子を御無心申て御座る、未何角と致て返弁致せぬ、今日はあれゑ參り、責て詞てなりとも御断を申さふと存る、まづ急てまいろふ、誠に金銀の返弁申申せば、か様に敷居の高い事も御座らぬに、イヤ何角と云内、早」是じや、扱く

久しう参らぬ内に、能普請を召た、又有德人は格別じや、しらぬ顔で案内をこふ。如常「亭主」へゑいたれ「何某」へハ「このあいたは久しうおりやらぬに、久々お見舞も申ませぬ、先は御かわりも御座りませいで、祝はしむ存ます、扱はは御見舞申さぬ内に、結好に御普請が出来ました「亭主」へそなたはしらぬか「何某」「〔へ〕」ナ今日が見始てござる「亭主」へそれならば、とてもの事にふしんを見ておくりやれ「何某」へア「亭主」へサ「こふおりやれ「何某」」へ是はへ、扱々けつかうな御ふしんで、中庭の取よふ、通り棚の被成よふ、達棚のお物好、中々面白ひお事でござる「亭主」
「イヤそふもおりない「何某」」へは是は早、御わたましの御連歌でも被成たが、是にあまた詠草が御座る「亭主」へ扱そなたもあから「何某」へ何でござる「亭主」へ連歌があがつたかと云事しや「何某」「〔へ〕」イヤあなたへ參りませねは、中々思ひ出しも致せぬ「亭主」へヤのふ、今日は某も隙でいる、連歌をせふでは有まひか「何某」へヤあなたのお相手には憚にござります「亭主」へいや／＼慰の事しや、先下にお居やれ「何某」「〔へ〕」イカ様おなぐさみと有お事なれば、お相手に成ませふ「亭主」へ扱きやく発句と云、題をいたそふ「何某」へいかさま左様ならば、出がちもよふござりませふか「亭主」へいかにもよろふ、先案じておみやれ「何某」へハアラ「亭主」へ何とはやうかんだか「何某」へこふもこさりませふか「亭主」「〔へ〕」何と「何某」へ「花盛り御免なれかし松の風」「亭主」へシタリ中々おもしろる「何某」へヤ惡ひ所をなをして聞ておくれなされませ「亭主」へ中々よおりやるが、そふおしゃる程に直してもみよふか、必氣にお懸きやんな「何某」「何しに心にかけませふ、御直し被成トされ「亭主」へ御免なれかしが何

とやら 「何某」 ヴィヤ私は御免なれかしで」 持た句^(ヤ)がと存ます 「亭主」 ヘ夫ならば夫にしておかしませ、ワキヲしやふ 「何某」 ヘ何と
で御座る 「亭主」 ヘ歌^(タ) ヘ桜になせや雨の浮雲 「何某」 ヘシタリ天神
も及せられぬ御句で御座る 「亭主」 ヘそのよふにはめずとも、悪ひ
所を直して聞ておくりやれ 「何某」 ヘ左様ならば、御ゆるされませ
「亭主」 ヘ急で云ておみしやれ 「何某」 ヘ私の存るは、桜になせや
が何とやら気にかゝります、とても事になさじと被成ならば、一
入よかるふ存ます 「亭主」 ヘ身共は、なせや／＼と云とふおし
やる 「何某」 ヘそれならば第三をいたしませふ^(タ) ヘ幾度も震に詫
ん月の暮 「亭主」 ヘ又わるひ、詫ぬと云事が有物か 「何某」 ヘい
や詫んで御座ります 「亭主」 ヘムそなたは連歌召れば、かな遣ひ
迄がよふなつた^(タ) こひせめ見る入相の鐘 「何某」 ヘあまり御句
がせわしふ御座る 「亭主」 ヘちとせわしいも、よふおりやる 「何
某」 ヘ歌^(タ) ヘ庭^(タ) 鳥もせめて別れば延て泣ケ 「亭主」 ヘそふ／＼
はのばされまひ 「何某」 ヘちとのひたも、よふござりませふ 「亭
主」 ヘ歌^(タ) ヘ人目免さぬ恋の閑守 「何某」 ヘ歌^(タ) ヘ名の立に使は告そ
忍ひ妻 「亭主」 ヘお立ちやれ 「何某」 ヘア 「亭主」 ヘそなたの
方へ、いつ名の立程使をやつた事が有 「何某」 ヘ是はきのとくでこ
さる、イナ事ヶおみへに立ました、始の御句が恋て御座れば、惣而
恋と申ものは、早人目にもれたかゝるものでござれ、使はつけそ
致てこさる 「亭主」 ヘムちとそれにお待ちやれ、是はいかな事、
彼者の方へ金子をかしてござれば、最前から何とやら詫句計を致
ス、少々の事てこされは、借状を戻し、済せてやろふと存る、イナ
のふ／＼、最前から七句で、殊之外氣懸りな、とても事に八句に
いたそふ^(タ) あまりしたへば文をこそやれ 「何某」 ヘ是をとこぞ

ヘ持てまいりませふか 「亭主」 ヘいや／＼、そなたの最前から詫
句を召するに仍て、少々の事なれば苦うなひに仍て、借伏を戻し、金
子を済てやろふと云事じや 「何某」 ヘ是を私に下されますか 「亭主」
ヘ中々 「何某」 ヘ先以て添ふ御座れども、思召ても御ろふじませ、
大分の金子を御無心申、済さ^(タ) ヘ御座るに、何とこの借状か以て帰ら
れませふ、是は御取置下されませ、其内御算用申ませふ 「亭主」 ヘ
は^(マ) 扱、某か志じや、取ておかしませ 「何某」 ヴィヤ^(タ) ヘせひとも御
無用に被成ませ 「亭主」 ヘすればいやか 「何某」 ヘハなんのいや
てござりませふ 「亭主」 ヘイナのふ、又せつ／＼おりやれ、どせん
のおりふしには互に句を致そふ 「何某」 ヘ私がお側に参つておなく
さみになりますならば、何時でもなりませふ 「亭主」 ヘイカにもお
りやれ 「何某」 ヘもこふまいります 「亭主」 ヘおりやるが 「何某」
「^(タ) ヘア添ふござる 「亭主」 ヘよふおりやつた 「何某」 ヘ
ハ、扱々世にはあるやうなけつかうなお方はなひ、か様な時には
和歌をあけて帰ふ^(タ) ヘやさしの人の心や、いつなれぬ花の主の。
色顯て此殿の、かりものをゆるさる、類な人の心や^(タ) 借金
はさらり／＼